

## 「さんべ夢ステージ」

### 1 趣 旨

- ・主体的に社会参画を目指す青年に対し、将来のリーダーとして不可欠な、リーダーシップを身につけるための場として、体験を通じた学びを提供する。
- ・リーダーシップをキーワードに、企画・運営の様々な場面で合意形成・問題解決を繰り返し、対人関係力等のリーダーとして必要な資質の向上を図る。

### 2 事業の概要

- (1) 期 日      ①企画編 平成30年 9月28日(金)～9月30日(日)【2泊3日】  
                  ②本番編 平成30年10月12日(金)～10月14日(日)【2泊3日】

- (2) 参加者      ①企画編 16名(大学生16名) ※募集20名  
                  ②本番編 16名(大学生16名) ※募集20名

- (3) 会 場      国立三瓶青少年交流の家

- (4) 日程・研修内容

#### 【①企画編】

1日目	○アイスブレイク ○テーマ確認
2日目～3日目	○班編成・準備 ○企画の検討・準備 ○ふりかえり

#### 【②本番編】

1日目	○テーマ確認 ○企画の準備
2日目	○企画の準備 ○企画の運営「さんべ祭1日目」
3日目	○企画の準備 ○企画の運営「さんべ祭2日目」 ○ふりかえり

### 3 事業の特色

#### ① プログラムデザインと企画のポイント

- ・本事業は、「国立三瓶青少年交流の家ボランティア育成ビジョン」に基づき実施している。育成ビジョンにおける「育成の継続」に位置づけ、継続的に活動しているボランティアを対象に、一定以上の付加価値を与える場を提供することを目的としている。
- ・「企画」「本番」の2展開に分けて、参加者が企画立案から施設開放事業「さんべ祭」におけるボランティア自主企画「さんべ夢ステージ」の運営に至るまでの流れを体験できるようにしている。
- ・短い日程で完結できるように、詳細な「与件」を設定した。
- ・企画づくりのポイントについての講義を設定し、参加者自身で企画づくりを進めていくことができるようにした。本番では、「さんべ夢ステージ」の運営のための当日のボランティアを加えて運営する。
- ・「さんべ夢ステージ」の当日ボランティアに対して、企画の内容を伝えたり、当日の動きを指示

したりすることを通じて、運営スタッフ間の情報共有の重要性を学ぶことに加え、リーダーとして必要な対人関係能力、コミュニケーション力、意思決定力を身につけることができるよう設定した。

## ② 運営のポイント

- ・事業のはじめにアイスブレイクも兼ねた、アクティビティを行うことで、企画を行う上で重要な約束事やお互いの価値観を確認しあい、参加者同士が安心して学べる環境を作ることができた。

## 4 参加者へのアンケート結果

### (1) アンケートの集計 (①企画編) (人)

	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体	11	5	0	0
プログラム	5	11	0	0
運営	10	6	0	0
職員の対応	13	3	0	0

### アンケートの集計 (②本番編) (人)

	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体	14	2	0	0
プログラム	14	1	1	0
運営	15	1	0	0
職員の対応	15	1	0	0

### (2) 参加者の声

- ・一体感が生まれ、すごくいいチームになってきている。
- ・自分の気持ちを表現する力をさらに身につけていきたい。
- ・チームの関係性や雰囲気がよく、一体感が生まれていた。
- ・個々が活動に対して積極的に他の人との関わりを重視しながら取り組んでいた。
- ・頼りになる仲間たちがいたから参加者全員が楽しめるイベントになった。
- ・たくさんの人の良いところを見つけることができ、それを自分が吸収し、自分の良いところにしていきたい。
- ・もっと準備の時間がほしかった。
- ・仲間がたくさん助けてくれたおかげで、だんだんと意見が言え、また積極的に活動に参加できるようになったことがよかった。
- ・司会と周囲の人との距離や話し合いの進め方など、本当に多くのものを得ることができた。
- ・共通理解の難しさ等の課題も明確に浮き彫りとなった。
- ・今回のさんべ夢ステージで気づいたことや学んだことを、今後の事業や、さんべ冬ステージで活かせるように家に帰ってからもしっかりふりかえりを行いたいです。

## 5 成果と課題

### 〈成 果〉

- ・本事業後の1ヶ月後にボランティアによる企画・運営事業「さんべ冬ステージ」(全5回)を控

えていることを踏まえ、「さんべ夢ステージ」を昨年度の4回開催から今年度は2回開催に短縮することで、学生の負担を軽減し、昨年度より参加者数が増加した。

- ・参加者アンケートから、一人一人が積極的に活動し、事業の企画・運営のプロセスを通して、様々な新たな学び・課題を得ることができた。
- ・参加者アンケートや次回のさんべ冬ステージの参加者の申込状況（申込定員越え）から、本事業が「国立三瓶青少年交流の家ボランティア育成ビジョン」における「育成の継続」として、一定以上の付加価値を与える場となっただけでなく、次にまた当施設で活動したいという気持ちを育むことができた。

#### 《課題》

- ・昨年度4回に分けて実施した事業を2回に短縮したことで、①企画編の時には、短時間で企画の内容の決定、準備を行わなければいけなかった。「もっと準備の時間がほしかった」という参加者アンケートからも、時間が足りないと感じる者も多かった。来年度については、多くの法人ボランティアが所属する島根大学の授業時間の増加に伴い、金曜日からの開催が難しくなることが想定される。限られた時間内でプログラム立案・準備ができるよう、さらに詳細な「与件」の設定が必要になる。



(担当：事業推進係 久城 秀太)